

M&A専門誌

Mergers & Acquisitions
Research Report

MARR マール

2007 December 12月号

発行人 高橋 豊
Yutaka Takahashi

編集長 川端 久雄
Hisao Kawabata

制作進行 加藤 順子
Junko Kato

表紙写真 十文字 美信
Bishin Jumonji

アート
ディレクション 石崎 路浩
Michihiro Ishizaki

デザイン 斎藤 圭太
Keita Saito

本文写真 平岡 仁
Hitoshi Hiraoka
福本 敏雄
Toshio Fukumoto

印刷 三松堂印刷株式会社

発行所：株式会社レコフ

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-1-1

麹町ダイヤモンドビル

TEL.03-3221-4942

2007年12月1日発行 通巻158号

雑誌18321-12

定価2,310円 本体2,200円

 RECOF

編集室から

BOOK

『株式会社はどこへ行くのか』

上村達男、金児昭 著

日本経済新聞出版社

1600円（本体）



株式会社や証券市場を舞台にした事件が頻繁に起きている。著者は、「株式会社が暴走する時代だ」という。なぜ、暴走するのか。それを許すとどんなことになるのか。早稲田大学教授である上村氏は、マスコミなどに頻繁に登場し、明快な言葉で切れ味のよいコメントを寄せてくれる。法学者がこれだけ脚光を浴びるのは日本では珍しい。学者らしからぬ豊かな造語力に感心しながら、短いコメントや寄稿では物足りなさを感じていた。経営評論家の金児氏との対談形式で、上村ワールドの全貌をたっぷり楽しめる。

会社の暴走の原因は、日本がバブル崩壊から立ち直るため、米国型市場主義を導入し、企業に活動のための最大自由を与えたことにあるとする。経済産業省主導で会社法の面での規制緩和が進み、その到達点が新会社法だという。自由は拡大したが、欧州のように自らを規律していく成熟した市民社会もなければ、米国のように違反に対しては厳しく取り締まる体制もない。このため、日本ではライブドア事件で明らかになったように、株式の1万分割とか、会社と証券市場をあたかも私的紙幣造幣機のように悪用した事件などが起きた。村上ファンドのように法律の抜け穴をついた株の買い占めもある。

暴走を放っておくことの怖さを長い会社の歴史がある欧州はよく知っている。米国も大恐慌を経験している。一步間違えれば、社会や経済を大混乱させ、動乱や戦乱まで引き起こしかねない取り扱い困難なしろものである。しかし、日本は、本格的に証券市場と一体の株式会社を使い出してまだ日が浅く、本当にその怖さを知らないというのだ。

最近では、会社法の理論では、ファイナンス理論会社法や「法と経済学」といった経済分析にポイントを置く法理論が力を増しているが、上村教授は歴史的観点からの洞察を大切にしている。制度・歴史学派的法学者を自認する。会社や証券市場の変遷、市民社会や人間とのかわり方を大切にしている。こうした視点から「会社は株主のものではない」と言い切る。

企業社会の土台となる会社法が日本では、有限会社を基本の会社像にしたため、民法に近い契約関係に基づく会社法になり、世界で最もルーズな会社法になってしまったと慨嘆する。「社会科学の素養のない人が、数学的に諸制度を因数分解してしまった」「既存の概念を勝手に変えた」「わけのわからない法律だから専門家が繁盛するというのは病理だ」などと鋭く批判する。一日も早く作り直す必要があるというのである。

上村教授は自らの学者としての歩みも語っている。証券取引法が会社法の補完と言われた時代に市場法として再構成した論文で学界に新風を送った。30代のことだ。今回の金融商品取引法の改正で、目的に「資本市場」の言葉が入った。いずれそういう時代が必ず来ると思っていたというが、20年余の時を経ている。上村教授のかねてからの主張である証券市場と一体の「公開株式会社法」が制定される時代もやがてくるのだろう。（青）

編集後記

就寝前のひととき、駆け足で日記を書く。終わると20年前の同じ日付の日記を読む。10年前だとまだ生々しい。思い出したくないこともある。20年前だともうはるか歴史の彼方で、古傷もいえている。何より明日、何が起こるか、「未来」が分かっているから安心して読める。

12月号の編集を終え、新しい年に思いを馳せる。と同時に20年前の1988年の記憶を呼び戻す。職業人としてピークの年だった。あれもあった、これもあった、と思ひ浮かぶ。「楽しい日の思い出ほど、ことに子供の時分、親のひざもとで暮らした日の思い出ほどその後の一生に尊く……有益なものはありません」。ある偉大な作家の言葉だ。それをなぞって言えば、大人になっての良い仕事の思い出も長い人生の支えになるのだろう。

さて、20年後に今日の日記をどういう気持ちで読むのだろうか。生きていればの話だが、人間、明日のことは分からない。（開）

本誌の記事およびデータの著作権は原則として株式会社レコフに帰属します。いかなる目的であれ当社に無断で本誌記事の複製、引用、転載等を行うことを禁じます。また、本誌記事の情報は、当社が信頼できると考える各方面から取得しておりますが、その内容の正確性、完全性が保証されているものではありません。当社は本誌記事に起因して被った損害については、その内容如何にかかわらず一切の責任を負いません。乱丁・落丁の場合はお取り替えいたします。マール室（03-3221-4942）までご連絡ください。